

図書館員が屋根のしたで読んだ本の話

篠崎図書館・篠崎子ども図書館スタッフ



江戸川区立篠崎図書館
江戸川区立篠崎子ども図書館

図書館員が屋根のしたで読んだ本の話

篠崎図書館・篠崎子ども図書館スタッフ

江戸川区立篠崎図書館
江戸川区立篠崎子ども図書館

目次

はじめに

わたしが穴ぐらにいた頃

やっぱり本を読んでいた

ふるさとの祭りを偲んで

2020年、春のこと。

小雨降る橋の上で

心が和らいだ本

なぜ芸能人の出産ニュースが多いのか（もしくは図書館とネットについて）

本棚

本好きのルーツ

4

7

10

12

14

17

18

20

22

28

読まない私、そして思うこと

はちみつとはつか油で、除菌・免疫力アップ

「今」を大切に生きる

猫のいる生活

絵本との出会い、再び

『蜜蜂と遠雷』を読まない

スマイレ王子

忍者気分で山を駆ける

えっ、そういわれても……

散歩

人の心を癒すもの

あながきのかわりに

30

31

33

36

38

40

42

43

46

48

49

52

はじめに

私たちは江戸川区立篠崎図書館・篠崎子ども図書館で働いている図書館員です。

2020年、新型コロナウイルスの感染拡大の影響は図書館にも及び、約二か月間に渡る休館、というこれまでに経験したことのない時期を過ごすことになりました。

記録のため、簡単ですが3月からの江戸川区の図書館サービスの変遷をまとめました。なお、緊急事態宣言については東京都に関連した事項のみの記入です。

3月2日 江戸川区立図書館全館で書架への立ち入りを制限するなど、サービスの一部を縮小するようになる。

3月28日 全館で当面の間午後5時で閉館となる。(篠崎図書館は通常時は午後9時30分閉館。)

4月7日 政府が緊急事態宣言発令。

4月8日 全館で臨時休館となる。(5月6日までを目途に)

4月27日 希望者に予約資料を郵送するサービスをスタート。(5月26日で終了)

5月7日 全館臨時休館の延長を決定。(5月31日までを目途に)

5月25日 政府が緊急事態宣言解除。

5月27日 全館で再開館。予約資料の貸出と返却のみ受け付ける。

開館時間は通常通りに戻る。

6月1日 ほぼ通常通りのサービスを再開。館内での滞在を二時間程度にとどめるよう協力をお願い

し、座席数も半数程度減らして運用。

7月1日現在に至る。

突然の休館で利用者の皆様には大変ご不便をおかけしました。休館期間は出勤人数の削減も必要でしたので、最低限の出勤者で最低限必要な業務をおこなっておりました。郵送サービスのスタート前は、週に二日ほどしか図書館に來ない、という時期もあり、多くのスタッフが自宅待機せざるをえない状況でした。

季節は春の盛りで外はどんどん暖かくなっていくにもかかわらず、人のいない図書館はとても冷えています。まさに「しんと静まり返って」いて、日に日にその「しん」という音が大きくなるように感じていました。再開館してから、まだ元通りではありませんが、利用者の皆様が入って、私たちが業務に戻って、止まっていた時間が動き始めたような、そんな感覚です。

休館当初、私たちが「今」在宅勤務で果たして何ができるのか、頭を悩ませていました。そんな中、この冊子のあとがきも書いてくれた元篠崎子ども図書館チーフの企画案を目にして、これだ！と賛同し、取り組むことにしました。

次のような内容です。

この期間に家で読んだ本（あるいは読まなかった本）について文章を書く。作品のあらすじをなぞるだけのものではなく、じぶんのおかれている状況や、あるいはその本をはじめて読んだ子どもころを回想するなど、自由に。買いにも、借りにもいけないため、いまもっている本にかぎられ、そのあたりへのエピソードも生まれるのではないか。図書館員だけでなく、世の中のおおくのひとびとがおなじ状況にあり、「こんなふうにごじていたんだ」、と親しみをもてるのではないか。

この冊子はそんな課題をもとに私たちが記した文章をまとめたものです。いつもおすすり本を紹介する文章とは違い、とても個人的なことを自由に書きました。作品の長さも文体もバラバラで読みづらいかもしれませんがご了承ください。

「あの時」の記録の一つとして皆様にお読みいただければ幸いです。

わたしが穴ぐらにいた頃

ある日とつぜん図書館が臨時休館になり、全員が在宅勤務になった。在宅でできる図書館の仕事ってなんだろう。

そんな事をゆっくり考える余裕はなく、自宅のできる仕事をスタッフにお願いしなければならない。しかし、みんなの生活環境はそれぞれだ。子育て真っ最中の人や、入社してまもない人、一人暮らしの人、猫と暮らすわたし。同じ仕事をお願いしても、みんなが同じ環境でできるとは限らないし、それに同じ成果を求めることはできない。家に帰ればそれぞれの生活があつて、それはひとつとして同じものはない。今まで同じ場所で働いてきたからそんな事は考えたことなかった。どうしよう。

ともかく、仕事の連絡をメールでやりとりする事にした。嬉しいことにみんな近況を報告してくれる。ある人は自宅で祭りごっこをしたという。またある人は、たこ焼きパーティーをしたと教えてくれた。外出できないかわりに自宅で子どもたちと遊んだり、普段できないことをしたり、それぞれの楽しみがあるようだ。そんな知らせを受けていると、こんなイメージがうかんだ。遙か太古の昔、穴ぐらに住む家族。外はいつ止むのかはわからない雨が降り続けている。穴ぐらの家族は狩りに出ることもできずに鬱屈とした日々を過ごしているが、ときおり家族でごく私的な遊びに興じる……。

そんな事を想像していると「人類はこつやつて危機を乗り越えてきたんじゃないか」と思うようになった。

何の根拠もないけれど。外に出ることができなければ、手の届くもので、自分の足で行けるところで遊べばいいんだ。また、こうも思った。この穴ぐらのような生活のなかで、みんな何を考えてどう過ごしているのだろう。ちよつとのぞいてみたい。

そんな発想から「身の回りにあるものを使って、または何も使わずにできる遊びや工作を考えて、短文にまとめて紹介する」という在宅勤務の仕事を思いついた。（この成果は篠崎子ども図書館ツイッターアカウン卜@edolih_kodomoの #きようはなにをしようかなで見ることができます）

さっそくみんなの穴ぐらからアイデアが続々とメールで届いた。実際に子どもと遊んで考えてくれたものや、子どもの頃やった遊びを思い出してくれたもの。そんなメールを読んでいるうちに、ふと、「自分の子ども時代はどうだっただろう？」と思うようになった。

わたしが子どもの頃にやった遊びを思い出してみる。兄と一緒にとにかく大きい穴を掘ったことや、高速の料金所の係の人の名前を当てるゲームに夢中になったこと。特別なものがなくても、名前のないような遊びを思いついでころげまわるように楽しんでた。

おとうさんは面白いことを思いつく人で、このような遊びの名人だ。寝る前には自作のおはなしをよくしてくれた。「世界うそ会議」といって各国の大臣が集まり、ひとりずつホラ話をするというオムニバス形式の話だった。どんな話だったか全く覚えていないが、おとうさんは「息をこらしてじっと聞いていた」と言っていた。（おはなし会で、じっと話を聞いている子を見ると、その時のわたしはこんな感じだったのかな

あと思うときがある）まさにわたしが穴ぐらにいた頃の記憶だ。

この期間に『ロシアの昔話』（内田莉莎子編訳 タチヤーナ・マブリナ画 福音館文庫）を寝る前に少しずつ読んでいた。「おおきなかぶ」や「空をとぶ船」などの昔話が素朴で美しい挿絵とともに収められている。奇想天外な話を読んでいると、ロシアの深い森の中で、よなよなおじいちゃん語る昔話を息をこらしながら聞いている子どもの姿が浮かぶ。きっとこんな穴ぐらの時間が人類を豊かにしているんだと思う。

篠崎子ども図書館チーフ

やっぱり本を読んでいた

緊急事態宣言がなされた。テレビをつければ新型コロナ関連のニュースばかりで、気が滅入る。なんとなく気分が晴れない時には、自分は軽めの連作ミステリが読みたくなる。着眼点は素晴らしいのに最後の詰めが甘い、惜しい刑事である押井刑事が主人公の藤崎翔著『おいしい刑事』シリーズを読む。しかし、いつものように好きなミステリを楽しめない。本が悪いのではなく、自分の気分の問題だ。日常が日常であってこそ、物語の世界を楽しめるのだなど実感する。

PCやスマートフォンの画面を見続けると、とにかく眼が疲れるので読書は紙派だ。歩いて行ける範囲に書店はない。そこで、たまたま手元にあった『40人の神経科学者に脳のいちばん面白いところを聞いてみた』（デイヴィッド・J・リンデン 編著 河出書房新社）を読む。毎日少しずつ読み、読了までに一週間かかってしまった。たぶん半分も理解できていないと思うが、そこがまた良い。ゆっくりと時間をかけてよむ時間的にぜいたくな読書ができた。脳について断続的にはあるが、一週間も考えることなんて普段はない。この本から私は「脳は柔軟なのだからとにかく使え」というメッセージを受け取った。これは本にそう書かれていたわけではなく、その時点で個人的にそう感じたということ。読んだ人により受け取り方はまた全然違ったものとなるだろう。35組の学者が「脳の働きについて世の中に向けて何か話すとしたら、いちばん語りたくないこと」について執筆された本なので、執筆者によっては反対の節を唱える章もでてくるし、誰の説が正

しいのかも現時点では不確定だ。そこがまた楽しい。何年後かにまた読み返したい。脳科学の世界はその間にどんな進展があるのか楽しみだ。

前述の本に刺激を受けた私は、おもむろに英語のラジオ講座を毎日聴き始めた。英語をマスターしようという目的ではなく、耳を使うという目的で始めたのだ。読書で視覚を使ったので、今度は聴覚を刺激しようという訳。我ながら単純だと思う、がやってみると結構楽しい。テキストはないので耳コピで文章をノートに書きだしていく。久しぶりに字も書くことになった。英単語を相当忘れていた。記憶を掘り起こす作業もできて一石三鳥だ。学生に戻ったように懐かしい。

懐かしいといえば、友人からあるマンガについての質問メールがきた。それがきっかけで自宅にある古いマンガを読み返し始めた。数年ぶりに読み返した作品に、感想がずいぶん変わったことに気付く。主な登場人物が皆自分より相当年下になっているのだからあたりまえなのかもしれない。同じ作品でも誰の目線で読むかによって違う楽しみ方ができると気付いた。

本の良いところは、何度でも出会えることだと思う。同じ作品でも読む年齢、状況によって受け取り方が違ってくる。自分次第で幾度も出会える。本って素晴らしいな。外出を控える日々、そんなことを考えています。

ふるさとの祭りを偲んで

この期間中の読書のことを一言でいうと「まったくできなかった」ということになります。それまで専ら読書は通勤電車の中でしていたのですが、三月くらいからは車内の人の様子が気になったり、スマホでコロナ関連のニュースを追うのに時間を費やしたりしてしまって、本を開いてみても全然集中できなくなっていました。

その替わり、なのでしようか、「漠然とものごとを考える」時間が増えていたような気がします。そんな電車内思考のトピックの一つが「信仰について」……なんてタイトルを付けるととても大げさですが。「宗教団体がクラスターになってしまった」「礼拝の仕方どうする、ラマダンはどう乗り切る」などという海外からのニュースを目にしたときは「ふーん。宗教も大変だなあ。でも命あつてのものだからまずは感染防止しないと元も子もないでしょう。」という程度の感想しかありませんでした。

そんな時、地元の夏祭り中止決定の報により、私は強い衝撃を受けました。意外なほどショックが大きかったのです。多くの人が集まる祭りは、今年は全国的に開催が難しいだろうことは頭では理解できても、子どもの頃からの年に一回の楽しみ、地元地域のアイデンティティともいえる祭りの中止に「感染防止のために中止は仕方ない」と言うには簡単には割り切れない、なんともいえない感情になりました。

神社の祭礼であるその祭りでは、氏子の各町内が山車を奉納し地域を練り歩き、町中にただよう悪霊・疫

病の退散を祈念します。祈祷を受けた山車には神様が降臨していて、悪いものを山車に封じ込めます。よって祭りの終了後すぐに山車は解体されるのです。そう、疫病の退散。それを願う祭り自体ができないとはなんて皮肉なことなのだ、願うことも許されないのか、三百年近く続いてきた伝統を途絶えさせるとはなんて強敵だコロナめ。などということを思ったり、同時に、山車以外の神社での神事は行われるということを知って安心したり。でも実は伝統や神事や疫病退散のことなんて今まで意識したことはなかったのです。暮らして密着しすぎていて宗教だとも信仰だとも思ったことはなかったけれど、改めて自身を形成するに大きな影響を与えている地元のことを考えるきっかけになりました。

篠崎地域の鎮守、篠崎浅間神社でも毎年夏におこなわれる大きなお祭り「幟祭り」があります。圧巻の「幟上げ」は二年に一回で今年はその年でしたが残念ながら中止に。来年上げる予定とのこと。「そういう幟も神様の抛り所とのことだったな」と、地元の祭りとの共通点にも気付きました。篠崎図書館では地域資料として『篠崎浅間神社 幟祭りについて』を作成しています。お祭りのことがわかる貴重な資料です。色々なことで「前と同じようにはいかない」という言葉を聞きます。もちろん意識改革も必要ですが、お祭りの意義、地域の絆や地元を思うこと。失くしたくないものもたくさんあるなというようなことをガラガラ通勤電車の中で考えていました。

2020年、春のこと。

わが家の一室は物置きと化していて、その部屋の奥に開かずの扉がある。山のように高く積まれたガラクタの、そのまたむこうに扉はあって、中には文字通り、天井近くまで本が詰め込まれている。もうどれくらい、閉ざされたままか。家にいる時間が増えたので、ひさしぶりにその扉を開いてみようと思った。荷物をかき分け、前に立ちはだかつてみるが、こうしている間にもまた、私を呼ぶ声が背後から聞こえてくる。今日も、扉は開かれない。

子どもとこんなに長い時間を共にしたのは、いつぶりだろう。私はずっと仕事に就いている。息子は1歳を過ぎてまもなく、娘に聞িয়ে言えば、うまれて半年あまりで保育園に入園した。それは覚えてたのセリフなのかもしれないが、ある日「お母さんって、あんまり明るい人じゃないんだね。」と息子に言われた。びっくりしすぎて、息子の顔を凝視してしまった。私のことを「明るい人」だと思っていたのか。

朝起きて、送り出す準備をする。日暮れに帰宅して、食事を作り、眠りにつくまでの時間をやり過ごす。その間、私は常に声を張り上げ、せわしなく動き回っている。子どもたちにとってのお母さんの姿は、これだ。たとえば、宿題に頭を悩ませたり。今日の給食なんだろうな、とか、部活動で汗を流す、とか。友だち関

係につまづくこともあったかも知れない。「そんな子ども時代が、お母さんにもあったんだ。」などと、子どもの頃の私は、想像したことがあっただろうか。

子どもたちにとって、お母さんはお母さんであって、それ以外の何ものでもない。きつと。ところが、お母さんを朝から晩まで一日中観察してみれば、どうやらいままでとは様子がちがう。声を張り上げ、せわしく動き回っているだけがお母さんではないのか。そんなことに息子は気づいたのだ。子どもは、よく見ている。息子にとって長い時間を共に過ごして見たお母さんは、さほど「明るい人」ではなかったようだ。息子よ、よくぞ見抜いた。

篠崎駅から約15分。晴れの日も、雨の日も、風の吹く日も、ただひたすらまっすぐ歩く。まっすぐに。そういう日常が、私には不可欠なのだと、改めて思い知る。子どもたちにとって、多少「明るい人」でいるためにも。子どもは子どもで、このせまくるしい家のなか、ときには先生、ときには友だち、そして、ときにはちよつと気になるあの子のかわりに、お母さんを「お母さん」と呼び続けている。はたしてお母さんは、一人で何役こなしているのか。じつに見ものである。

はやく、日常が戻りますように。

4月の終わりに、書いています。

というわけでこれは、自分だけのために本を読む時間はなかった、というはなし。そんなある日、暇を持て余した息子が、地球儀を前に私を呼んで、ふと、「どうして地球はまるいのに、人間は立っていられるんだろう？」という質問を投げかけてきた。手元の本棚に差さっていた一冊の絵本、『天動説の絵本 てんがうごいていたころのはなし』。小学三年生には少しむずかしかったかもしれないが、何日かに分けて、ゆっくりと読んだ。ペストや魔女狩りについても触れられている。この大地の果てに、何かあるのかわからない。わからない、というおそろしさ。世界中の価値観が、徐々に、そしてがらりと変化する瞬間。いつの日か「2020年」がこの年表に刻まれるときがくるのだろうか。作者は、安野光雅。20年近く前、島根県津和野にある安野光雅美術館に、青春18きっぷを使って一人訪れたことを思い出す。たしか、津和野のユースホステルは寺院に併設されていて、五右衛門風呂に浸かったな、という、それはまさに青い春の思い出。まだ「お母さん」ではなかった頃の。

小雨降る橋の上で

持病で半年に1回、都心の大学病院に検診に行かなければならない。キャンセルすると次の予約がいつ取れるかわからないのでマスクをして出かけた。地下鉄を降りていつものように橋を渡ると、冷たい雨の中、一人の男性が立っているのが見えた。雑誌『ビッグイシュー日本版』の販売者だ。2003年創刊のこの雑誌は、販売者をホームレスに限定し、その収益で彼らの生活を支えようというものだ。

病院に行くのは嫌だが、これを買うのがちよつとした楽しみになっている。社会問題を扱った記事が充実しているのはもちろん、毎回ビッグな人物が登場する「スペシャルインタビュー」では、シンプルだが心に響くメッセージが見つかる。レディー・ガガが「忘れないで、自分自身でいること、自分の好きなことをつくるのが何より大事。成功したかどうかは自分が決めること」と語った切り抜きを、今も持っている。ホームレスの方が読者のお悩みに答える「ホームレス人生相談」も味わい深い。

通院し始めてから何年もたった。あの場所で雑誌を売る人も随分長いな。ステイホームって言われても、そういうわけにもいかないだろう。本当は私もここに来なくて済むようになりたい。あの男性もホームレス限定の販売者を辞められる日がきた方が良いのだろうか……。複雑な気持で買う1冊。黒人奴隷の伝記を映画化した『それでも夜は明ける』の監督ステイヴ・マックイーンが「自分にはやりたいことをやる権利がある」と言っていた。

心が和らいだ本

自粛生活が続きなんともいえない不安にかられていた頃、気持ちをあたたかくしてくれた本が小川系の『ツバキ文具店』です。

自宅待機中、感染防止対策を行うほかに私が心がけていたことは主に3つありました。①普段できないことに取り組む、②やみくもに情報に踊らされない、③自分の気分をフラットな状態に保てるよう工夫する。今までに経験のないことが起き、不安や制限のある生活。情報の確認はしたいけど、ニュースを見ると気持ちがふさぐ。何か自分の気持ちがほっとするようなことをしよう。そう思っていた頃、友人グループから無事の確認や、家時間の過ごし方について連絡が入るようになりました。そこで紹介されたのがこの作品です。

主人公は文房具店を営むかわら、手紙の代書を請け負う女性。代書とは、本人に代わって手紙を書いて送ることであり、ラブレターに離婚報告、借金の断り状や絶縁状など内容はさまざまです。彼女は依頼者それぞれ別の事情や気持ちに寄り添い、また受け取った相手の気持ちをも気遣い言葉を紡ぎます。依頼者自らでは上手く言葉にできない気持ちを、それは見事に表現します。周囲の人の言葉により主人公が気付きを得る場面も心に響くものがあり、読後はほっこりと温かい気持ちに満たされました。友人たちや知り合いにも会えず、家族とずっとひきこもりがちでちよっと鬱々としていたので、目の前のことに心を込め、迷いながら

も丁寧に向き合う主人公の姿勢に、この状況の過ごし方のヒントをもらえたような気がしました。また周囲の人たちとのお互いに支え合っている関係も素敵です。人との交流やふれあいを制限されている今、とても感慨深いものがありました。

なぜ芸能人の出産ニュースが多いのか（もしくは図書館とネットについて）

「家では必要ない」との理由で、今まで拒否してきたインターネットを最近になって導入した。その矢先のコロナ騒動である。今までTVやラジオが主な情報源だったのだが、渦中ではコロナ関連のニュースばかりなので、ネットにてその他の世の動向を見ていた。結果はこの標題のとおりである。

現在、図書館の業務においてインターネットは必要不可欠のものである。図書館でのレファレンスには、できるだけ本を提供したいのだが、質問内容によっては最新の情報を要求されることも多く、ネットの出番となる。近年、雑誌の刊行数が激減したのもネット及びスマホの普及によるところが大きい。携帯端末を介した利用による携行のしやすさや、定額読み放題等は魅力的である。日々更新される最新の情報に「月刊」ではなかなか対応できないということであろう。長年自分の愛読していた雑誌もネット配信になってしまっで少し寂しく感じるのだが、時代の流れには逆らえないのかと。

では小説などの書籍、いわゆる電子書籍はどうなっているのだろうか。話には聞いていても利用の実態を見るのがあまりないので、さっそくネットにて調査してみた。

結果、年々紙媒体の出版物が落ち込む一方、小規模ながら電子書籍の売り上げは右肩上がりである。そのほとんどはコミックによるもので（最近では海賊版の摘発により正規版に顧客が流れたようです）、活字のものはまだ少ないが確実に売り上げを増加させている。確かに広告でも見かけるようになったので、ここ数

年でマーケットがかなり拡大しているようだ。他自治体の話ではあるが、図書館での電子書籍貸出しの話も出て来た。電子書籍の完全普及はまだ時間が必要だと思われるが、今回のように図書館や書店が機能しなくなる状況を考えると有用性を感じざるを得ない。

参考WEBサイト

「日本の出版統計」 全国出版協会 <https://www.jppea.or.jp/statistics/index.html>

本棚

自宅にいる時間が長いので、自宅の本棚に触れる回数が増えた。ただぼんやりと眺めるだけの時間も楽しい。とりわけ自分の本棚というのは、私の味方であって、本当に宝箱のようだなと思う。

新型コロナウイルスの感染拡大をうけて政府により緊急事態宣言が発令され、私の勤務先である江戸川区立篠崎図書館は他の多くの公共図書館と同様に、当面の間休館となった。一般スタッフについて、しばらくの間は在宅勤務をすることが決まった。在宅勤務期間がはじまって、本に関することで読むよりも先に取り組んだのは、本棚の本に片っ端からブックカバーをかけていく作業であった。

今年の初めに引越しをした。それに伴い本棚を買った。これまではダンボール箱に本を保管しており、読みたい時は漁って出す、気が済んだらしまう、としていたので、所持している大抵の本の姿は茶色い厚紙に守られて見えなかった。だから今整然と並んだ背表紙を見ているだけでも、無限に広がる本の世界が直接目に見えるようで心が躍る。

ただし心配事があった。こちらに晒されている背表紙は、窓からの陽に当たっていずれ日焼けしてしまうのではないか。置き場所によつては表紙や裏表紙も焼けて褪色してしまうのでは。仕方のないこととは言え、せつかくの装丁が色褪せてしまうのは非常に残念なことである。だって本を手にしたときのワクワクは、表紙、あるいは背表紙を目にするところから始まるからだ。

持っている中には既に状態がかなり良くないものもあるけれども、それだつてせめて現状をなるべく維持したい。紙製のブックカバーをかけようか、しかしタイトルが見えないと探しにくい。書名をカバーに書き写したり印刷したりする方法もあるが、大変な作業だ。どのみち表紙は見えないし。良い方法はないかと悩んでいた折、市販の透明ブックカバーにUVカット仕様のものがあることを知った。50枚入りで1000円〜1500円程度。現実的な値段。すぐに通販サイトで、サイズごとにいくつか購入したのだった。

それをかける作業が、これまでなかなかできなかったのだ。緊急事態宣言前にも多少は進めてあったものの、任務完了までの先は長い。物によつては帯を外して中に挟み直したり、汚れているようなものは拭いてみたり、一冊ずつ一応確認していくので、中にはしばらく忘れていたような本を開くことになる（引越して作業をしているときは慌ただしく、こういった手順を丸ごとすっ飛ばしたのだ）。手元にある本というのは、例えその時は忘れていても何かしら思い出や思い入れがあるもので、本を開けば蘇った。もちろん、たびたび手に取るようなお気に入りの本でも。ブックカバーかけは、それに耽りながらの作業になった。

サリンジャーのベストセラー『ライ麦畑でつかまえて』の、村上春樹による翻訳版『キャッチャー・イン・ザ・ライ』は、初読以来、取り出しやすい場所にずっと置き続けている本の一冊だ。現在も本棚の手前側に収納している。

ところで、小口の真ん中よりやや下あたりがやけに黒ずんでいる本が、図書館の所蔵本でときどき見られる。ちようど本を開いたときに親指が当たる箇所で、繰り返し読まれているうちに汚れてしまうのだ。今回

の作業中に気が付いたのだが、私の『キャッチャー・イン・ザ・ライ』は（良いのか悪いのか）まさにこうなっている。

通して読んだのは今のところ最初の一度きりだが、ある一部分を繰り返して読むうちに小口がこうなってしまう。それは16歳の主人公ホールデンが、子どもの頃から慣れ親しみ思い入れの深い自然歴史博物館について語る場面。日々の小さなきっかけで変わり続ける自分と、いつ訪れても変わらぬ姿を保ち続ける博物館の展示物を対比して思いを馳せるシーンだ。

何がこんなに心に響くのか、自分の中の答えは未だに出ていない。ひとつは懐かしさだろう。子どもの頃、たまの家族でのお出かけの定番は、ドライブがてら連れて行かれる隣県の県立博物館だったので（そしてそのちよつとした遠出がすごく好きだった）そのときの記憶と重なるからかもしれない。だけどそれだけでは理由としてしっくりこない。私がホールデンの心境とびったり共感しているとはおそらく言えず、本の中で彼はその答えを教えてくれない。読むたびに込み上げてくる涙の正体は謎のままだ。しかし正体が分からないそのシーンは、読み返すたび間違いなく私に寄り添い、受け止めてくれている。

だからいつも葉（正確には購読者アンケートのハガキを葉の替わりに）を挟んである。白水社ペーパーバック・エディションの、202頁8行目から206頁1行目まで。これからも幾度となく読み返すだろう。懐かしいといえば、幼いころに親戚などからお下がりですてられた本の中には、もはや私が何番目の持ち主なのか分からないものがある。また、実家から持って来た本の多くは児童書や絵本で、夢中になったり、妹と

隣り合って読んだりした子どもの頃の思い出に誘ってくれる。既に出合っている本が並んでいるのだから当然かもしれないが、懐かしさを感じる本が棚の大部分を占めていることに気がつく。

本の話から逸れてしまうが、小さい頃に母の影響で観たアニメ『銀河鉄道999』の劇場版に大変印象的な劇中歌があって、歌詞の一部はこうだ。

「こわれたおもちゃ箱を 子供みたいに 抱えこんで 涙ぐんで
それでどうなるの」(『やさしくしないで』 歌かおりくみこ 作詞 中原葉子 作曲 中村泰士)

劇中で、美しい歌手が場末の酒場で弾き語り、客の機械化人間たちは二度と戻らない過去を想って泣く。懐かしさを感じるシーンを読み返したり、付き合いの長い本の背表紙を眺めたりしていると、この機械化人間さながら感傷的になる。後ろ向きでしかない気持ちで、歌詞の通り、それでどうなるのだろうか。ただ懐かしいものは大切だし、それを愛でる時間は何にも変え難く、そうしているのが幸せなのだ。生きた人と対面してもなかなか得られない慰めをこうして本棚は与えてくれる。それに、ときどき思い出さないと本当に忘れてしまう。

さて、時間があるこんな時期だからこそ活躍している本がある。美術解剖学。趣味の域をいつまでも出られないが絵を描くのが好きで、この手の本はぼつぼつ持っているのだけれども、何せ横着な人間だから今まではそれほど活躍させられなかった。いつか上達して夢のような絵を描ける日を想いつつ、帰宅後は布団にまっしぐら。駄目ダメだめだ。怠け者すぎる。だけどこの機会に少し時間を割いて、絵の練習をしたりもし

ている。

主観で感情的な印象をつけるとするならば、お絵かきに関する本が並んでいる本棚のこの一角は、私の住まいの中でもかなり前向きな箇所である（他に前向きなもの例。金魚を飼っている水槽、額縁、ヘッドホン、いくつかの小銭用貯金箱、石鹸、お腹が空いたときの台所など）。そもそも好きなことについての資料だし、見た目も素晴らしいし、私の心が次第で自分を高めてくれるツールという意味でもそうだ。だからこの本棚には、私の夢の先駆けが光っていると信じていても過言ではない（過言だったかもしれない）。

画集は時間泥棒だった。一度開いてしまうと見入ってしまつてしばらく閉じられない。積ん読も多かった。読もう読もうと思つていた本の他に、奥にしまい込みすぎてすっかり忘れてしまつていた何冊かとも再会した。ごめんね、久しぶり。次は何を読もうかと思ひながら、ブックカバーをかけ終えた本を、順番を悩みながら並べた。

懐かしいもの、好きなもの、新たな楽しみが本棚にはある。たまに、全ての物事が怖ろしく、憎く、終わりがないように思えるときがある。誰よりも長い時間、いちばん近くで共に過ごし、当てにしてきた筈の自分のことすら恨めしくなつて、どこにも味方がなくなつて途方に暮れる。匙を投げてしまおうかと思う。そういうとき、本棚はこちらに無理をさせない。読むという行為は一方通行だ。本は急かさなにかわりにも言わない。こちらが力を振り絞つて、あるいは惹かれるようにして何かを訊ねるのを待つている。自分が過去に心を動かされた本のどれかは、きつと今度も味方になつてくれる。そんなときだからこそ別の味方が

見つかることもある。本は言葉を携えて、ただ傍にいてくれる。そうして力が戻ったら、今度はそっと引張り上げてくれるのだ。そうなった後は、色々なことがまあまあ満更でもないものに変わっている。

自宅の本棚には、歴戦（たとえ、たかが知れていたとしても）を共に切り抜けてきた味方が並んでいる。そこにあるだけでも魅力的でいて、かけがえのないものが詰まって、目に見えたり見えなかったりする色鮮やかな棚は、本当に宝箱のようだなと思う。そして眺めていると、まだ見ぬ宝物を探しに行きたい気持ちが湧いてくる。本の数は知れない。図書館っていい、まるで宝島のような場所。宝の地図は心の中にあるだろう。

本好きのルーツ

小さいころから本屋さんをぐるぐる回るのが好きだった。母に連れられて行った地元の本屋さんで、毎回本を1冊買ってもらうのがすごく嬉しかった。漫画以外は好きに選ばせてくれたので、今思えば、子どもの教育のためというよりも、家で大人しくさせるためという意味合いが強かったような気がする。大人になつてからも本屋さんをぐるぐる回る趣味は変わらず、そして今は図書館の中をぐるぐる回る仕事に就いている。そもそもこの仕事に就くまでは、私はほとんど図書館を利用したことがなかった。行くのはもっぱら本屋さんの方で、週に1度くらい店内をゆっくり回りながら気になる本を探し、そして購入した。家の中には所狭しと本が置かれ、机の上にはまだ読んでない本が何冊も積まれていることもあった。

司書として図書館で働くようになって、途端に本を買わなくなった。読みたい本があれば図書館で借りられる、という便利さを知ったからである。新しい本や漫画、人気の本はなかなか読めなくなってしまったが、私はあまり気にならなかった。それからは図書館が私の本棚になり、ほとんど本屋さんに行くことはなくなった。

ところが今、図書館が休館になり、読みたいときに本が読めなくなった。いつもそばにあった本がないというのはやはり少し寂しく思う。図書館が利用できなくなって、私と同じように寂しく思う人がたくさんいるのだろうか。もしも小さいころ大好きだった本屋さんに行きたくても行けない時期があったとしたら自分

はどうだろうか。駄々をこねて家で暴れるだろうか。それとも一日中布団で泣いただろうか。図書館に行くのが好きな人にとって、今の現状はともつらいと思う。自分にとってはあの本屋さんであったように、図書館という施設は、ある人にとってなくてはならない大切な場所であるとふとそんなことを思った。

読まない私、そして思うこと

普段あまりミステリー小説は読まない私。というか図書館に勤めているのに、読書が苦手。そんな私にも時間があれば読めるはずと喝をいれて。時間はたっぷりある。この機会に苦手を克服したいと思い、東野圭吾の『変身』を読むことにしました。タイトルに惹かれて手に取ったのがこの本でした。自分の殻を破って変わりたい願望が私の中にもあったのかもしれない。

『変身』はテレビドラマにもなったので、知ってる人も多いかもしれませんが。ある日突然主人公の青年が不慮の事故にあい命は助かったものの、脳を負傷し移植手術を受けます。移植した他人の脳の記憶と自分自身のかすかに残ってる記憶。違和感や恐怖と戦いながら本当の自分を探していきます。事故の前は優しい性格で、人と争うことが嫌いだった青年。少しずつ自分でもわかる変化が起こっていきます。

今、コロナウイルスの大流行で今までとは違う生活様式が求められています。そのストレスで怒りっぽくなくなってしまったり、人にあたってしまったたりするかもしれません。でもこんな時だからこそ心にゆとりを持ち人に優しくしたいと思います。変わりない日常の大切さに気づくきっかけになりました。

はちみつとはつか油で、除菌&免疫力アップ

新型コロナウイルスが猛威を振るう中、やらなければいけないのは、3密を避けることと、手洗いうがいなど除菌に努めること。あとは、免疫力を高めることも大事かと。

このうちの除菌と免疫力に関して、はちみつとはつか油を思い出しました。前田京子著『ひとさじのはちみつ』『はちみつ日和』『はつか油の愉しみ』（いずれもマガジンハウス出版）に書いてあったと。

以前読んだこれらの本、図書館でいつでも読めるからと自宅には無く……。インターネットで買えるかと探してみたら、某フリマアプリで3冊とも見つけました。実はこちらのフリマアプリ、購入だけではなく、出品でも利用していました。というのも、正月に帰省した時、母から趣味で集めたジグソーパズルがいなくなっていたので、処分してくれと言われていたからでした。しばらくは暇が無くて放置していましたが、今は時間もあるし、出品しだすと、どんどん売れていきました。皆さんおうち時間を楽しむ手段を探しているのでしょうか。

話は逸れましたが、そんなこんなで手に入れたこれらの本を読み返してみました。

はちみつは、古代ギリシアの時代には既に抗菌剤の代表であり、ペニシリンに代表される新薬が百年ほど前に登場するまでは医薬として利用されていました。現在は、甘味料の一つと考えられますが、本物のはちみつは、抗生物質が効かない病気にも効果を発揮することが確認されています。

一方はつか油は、ミントの爽やかな香りで癒やしてくれますが、主要成分のメントールやカルボンが脳の中枢神経に働きかけ、すつと疲れを取ってくれるとのこと。また、頭痛や喉の痛み、鼻づまりなども緩和してくれます。

まさしくこれは今必要なものではないでしょうか。いずれの本にもレシピが載っていますので、どのように活用すればよいのかがわかります。しかし、はちみつは1歳未満のお子さまには与えてはいけないとか、本物のはちみつでなければ意味が無いか、はつか油の原液の扱い方など、注意事項もありますので、参考にされるのであれば、よくご覧になっていただきたいと思います。これで絶対大丈夫というものではありませんが、予防として常備しておくと思えます。

なかなか以前のような日常に戻りませんが、できるだけのことをして、穏やかに時を待てればと思います。どうか、感染などされませんように、お気を付けください。

「今」を大切に生きる

世の中が大変な事態になってしまった。緊急事態宣言が発せられ、わが図書館も完全休館となってしまった。

自宅待機の期間に入り、家の中で過ごす時間がぐっと増えた。せつかく時間ができたので、少しは図書館員らしく（？）、自宅にある図書館学関連の本を読み返してみた。息抜きに、所有するDVDや録画したテレビ番組などを見たりしたが、それもだんだん食傷気味になってきたので、時間を区切り、静かな部屋の中の読書の時間にあてることにした。

今は図書館も休館で、書店の店頭で購入することも難しい状況なので、当然手持ちの本の中から選ぶことになる。しばらく読んでいなかった分厚い文庫本を、久しぶりに読んでみようかとも思ったが、私の目に留まったのは、森下典子著『日日是好日 「お茶」が教えてくれた¹⁵のしあわせ』という文庫本だった。

私がこの本を知ったのは、同名の映画がきっかけだった。茶道をテーマにした内容ということで興味もあったし、しかも好きな女優が出るというので、楽しみにしていた作品だった。映画公開前にたまたま入った書店の文庫本コーナーでこの本を見つけ、映画の原作本ということで、即決で購入した。

文庫本なので、カバンに入れて持ち歩き、通勤の合間などに繰り返し読んだ。

それほど日常的に読んでいた本なのに、家にいる時間が増えた今もなお、やっぱり手にとってしまうのは

なぜなのでしょう。

この本は、著者の森下さんが二十歳の大学生のころ、ひよんなことからお茶を習い始め、就職、失恋、父の死という悲しみを乗り越えながら、二十五年間、著者がお茶を通じて体験したことが綴られている。

この本の中で、繰り返し出てくるのが、『今』に気持ちを集中する」という言葉だ。仕事のことや家庭のこと、自分自身のことや心配ごとや焦りの気持ちが生じることは多々ある。そんな時こそ、「自分を考えることから切り離し、ひたすら五感に心をすま」し、「どんな日も、その日を思う存分味わう」ことが大切だと。「そうやって生きれば、人間はたとえ、まわりが『苦境』と呼ぶような事態に遭遇したとしても、その状況を楽しんで生きていけるかもしれない」と。

連日、暗いニュースを目にし、先行きの見えない状況が続いてくると、合間に流れる明るく前向きな話題のニュースを目にしても、不安な気持ちや払拭されることが多くなってきた。そうでなくとも、ここ数年、毎年のように各地で大地震や台風、洪水などの自然災害が起こり、日常生活に支障をきたすような事象も繰り返し起こるようになった。今回の非常事態はその最たるものだと思うが、この先も、そのたびに振り回されることになるのかと思うと、憂鬱になってくる。

そんな時だからこそ、私はこの『日日是好日』を繰り返し手にとってしまうのかもしれない。この本を読んでいると、ふっと心が軽くなる瞬間があるのだ。本の中に書かれている、著者の性格や家族構成など自身と重なる部分があったりもして、その分感情移入しやすくなっているのかもしれないが、著者と一緒に

私自身もお茶というものを疑似体験し、著者にとつてお茶が心の支えになっていったように、私自身も、この本が心の支えになっていくような気がしている。

この本のまえがきに「生きにくい時代を生きる時、真つ暗闇の中で自信を失った時、お茶は教えてくれる。『長い目で、今を生きろ』と。」とある。こんな状況の今だからこそ、私はこの本を読む意味がまさにここにあると思うのだ。

ところで、この本の題名でもある「日は好日」とは、柘野俊明著『平常心の心得』によると、「人生には楽しく喜びに満ち溢れた日もあれば、つらく悲しみに打ちひしがれる日もある。どんな日も人生にかけがえない経験をもたらしてくれる一日、ということ。」とある。こういう心持ちでいることが、心身ともに不安定になりがちな、今のこの状況のときこそ大切なのではないかと思う。この自宅待機中に、私が書棚から『日は好日』を思わず手に取ってしまったのは、そういう意味では必然のことだったのかもしれない。

猫のいる生活

皆様には見ているだけで癒される愛らしい家族はいらっしゃいますか。

私の家には一匹の猫がいます。ミヌエットという種類の長毛の男の子です。今は一匹しかいませんが、以前はたくさん猫が暮らしていました。家の前で子猫を生んでしまった野良猫一家をそのまま家族として迎え入れたことがあります。その時のエピソードを思い出す切っ掛けとなった一冊を紹介します。

緊急事態宣言中に読んだ『猫といっしょにいるだけで』というタイトルのこの文庫本は『日日是好日』の作者として有名な森下典子さんとそのご家族、そしてなんの縁か関わることになった野良猫一家との何気ない日常を描いたエッセイです。

ある日作者の母親が、自宅庭の片隅で野良猫が子猫を生んでいることに気が付きます。野良猫に対してあまり良い感情を持っていない作者ですが、親戚や知り合いに助けられながら子猫たちの里親探しをする事になります。最終的に野良猫一家はそれぞれ新しい家族に迎え入れられるのですが、その過程で作者は知らなかつた猫の魅力や、今まで自分に余裕が無かつたがために見落としてきた小さな幸せに気が付き始めます。

現在コロナウイルスの影響で全国的に大変な状況となっています。日々のストレスや上手くいかないことが続けば、自分の事だけで精一杯になってしまいがちになります。しかしこのエッセイを読んだ後には、小さくても何気ない幸せは日常のそこかしこにあるのだということを変更して認識することができ、また自分よ

りも小さな命に手を差し伸べることを忘れないようにしたいと思えるような、ほっこりとした温かな気持ちになるのではないでしょうか。

皆様も機会があれば是非ご一読ください。

絵本との出会い、再び

自宅待機中、TVをつければコロナの報道ばかりで気が滅入り、何もかもやる気が起きない。これでは時間の無駄遣い。と一念発起し、家の中の断捨離を始めた。

普段忙しく、見なかったことにしていた段ボールの中を覗いたら『いもむしろくべえ』という絵本が出てきた。確か小学生の時、母に買ってもらい、ずっとお気に入りの本でどこへ行くときにも持って行った記憶がよみがえった。ぼろぼろでシミもたくさんついていたが、クレヨンで描いたような素朴な絵に引き込まれページをめくった。

いもむしろくべえと、ピアノが上手な、そうすけおじさんの話。のんびり葉っぱを食べるろくべえが、嵐の夜に旅に出たのびてしまったが、そうすけおじさんに助けられコーヒーカップの寝床で目覚めると、蝶になり明るい空に飛び立つという話。

ある日そうすけおじさんに「ろくべえまいにちたのしいかい」と聞かれ、ろくべえは「おひさまはひかり、かぜはそろそろうたうたのしい」と答えて「おいらはまいにちたのしいか、たのしくないか」と考える。まさに今家で過ごす一日を楽しいか、楽しくないか考えていたところ。ろくべえみたいに、のんびり、今できることを楽しく過ごすそうと思ひ、悶々とした日々から解放された。昔読んだ絵本で元気をもらえた。

それからは、大好きなショパンの楽譜を引っ張り出し、ピアノの練習をしたり、いわゆる積読状態だった

『蜜蜂と遠雷』を読み進めたり『羊と鋼の森』を再読している。

案外、家においても楽しく過ごせるようになり、昔読んだ本も役に立つものだと感じた。今後このように、再読し再発見ができる本を紹介していけたらいいなと思っている。

『蜜蜂と遠雷』を読まない

緊急事態宣言が出され、図書館も休館となったあと、しばらくの間あまり本を読もうとは正直思わなかった。なぜかと言われるとはつきり答えられないのだが、おそらく今後一ヶ月近くにわたり外出を自粛するに当たって、必要なものは何かとか、仕事は（給料は）どうなるんだろうとか、世間はどのような状態になっているのかとか、そういうことに気をとられていて、さあ時間ができた本を読もう、という気分になれなかったのだろうと思う。

出勤も週1〜2日になり、ようやく自粛に慣れて落ち着いて来たところで、では積読になっているものをまずは片付けようかと考えた時に、最初に読もうとしたのが『蜜蜂と遠雷』である。この作品は2017年に直木賞と本屋大賞を受賞し、その当時から話題になった。我が家にあるのはその時に買った分厚い単行本である。私はクラシックをよく聴くので、ピアノコンクールを題材にしたこの小説に惹かれたというのがこの本を買った理由だったと思う。

ではなぜ積読になっているのか。理由は一つ、長い。上下二段組でページ数は500ページを超える。私では本を読むとき、ちよつと厄介な習慣がある。1冊の本または作品を一気に読んでしまいたい。場合によっては深夜の2時3時まで、徹夜に近いことをしてでも読むという読書スタイルなのである。おそらくこの『蜜蜂と遠雷』もそれに近いような感じで読むことになるだろうと容易に想像でき、翌日仕事があると思うと

読むのを躊躇する。じゃあ休みの日に読めばいいじゃないかと思うのだが、そういう時に限って読む気が起きない。そんなこんなでズルズルと読むのを先延ばし、気づいた時には本棚の肥やしになっていた。

ようやく訪れた絶好の読書チャンス。張り切って読むべし、と思つて手に取ろうとした。……がなぜか背表紙だけ見つめ、隣にある漫画本を取ってしまった。なぜ？ と自分でも思うが今日はそういう気分ではないのかと思ひ直し、明日に回す。だがその翌日も、そのまた翌日も何かと理由をつけて読まない。なぜだろう。料理をしなければ、片付けをしなければ、そういえば新型コロナの情報を見っておかなければと、気づけば本を読む暇がない。なぜだろう。絶対に通常通りの仕事がある日よりずっと時間があるはずなのに。

緊急事態宣言が出されてから数週間、気づいたことがある。少なくとも私は時間ができたからという理由では本は読まない。『蜜蜂と遠雷』はきつと素敵な作品なのだろうと頭の中で妄想を膨らませながら、今日も読まない。

スマイレ王子

「私、スマイレの花が好きなの。うちの周り、コンクリートだらけでちつとも見られないから寂しい」。ふと漏らした一言から、2週間余りたったランチタイム。その人は白い袋に入れた何かを手渡ししてくれた。「うちの庭に咲いているスマイレです。あれから鉢に植えて、根がついたので持ってきました」

嘘でしょ、私のために？　もしかして恋の始まり？　とウン十年前なら誤解してしまうところであるが、すでにいい年の私、もちろんそんなことにはならない。それにしてもなんていい人なんだ。少ない言葉で感動と感謝の気持ちを述べ続けると、「実は園芸好きの母がほとんどやってくれたんですけど」とのこと。ありがとう、お母さん！

これがきっかけでさらにスマイレ熱が上昇し、『スマイレハンドブック』（山田隆彦著　文一総合出版）を借りて春を待ち望んでいた。同著者の『日本のスマイレ探訪 72選』（太郎次郎社エディタス）によれば、4月から5月は高尾山や御嶽山でたくさんさんのスマイレが見られるらしい。ハンドブック片手に出かけよう、と思っていた。

4月下旬、少し風が吹く快晴の今日。きつと山を歩いたら素敵だろう。どこにも行けない私の家の家のベランダでは王子（のお母さん）がくれたスマイレが揺れている。この小さな花にどれだけ励まされたことだろう。来年は君の仲間がたくさん会えるといいな……そう思いながら『スマイレハンドブック』をもう一度開いた。

忍者気分て山を駆ける

コロナウイルスの感染が一向に収束せず、日本全国に緊急事態宣言が出されました。それは小説の世界の話だけで、まさか私が生きている間に出されるとは、正直夢にも思いませんでした。人通りが少なくなかった渋谷などの大都市の様子をテレビで見ると、薄ら寒くなります。そのような中、私も例に漏れず不要不急の外出を自粛し、自宅で在宅勤務の日々を過ごしています。生活リズムを崩さぬよう早寝早起きし、普段より健康になっているかもしれません。パソコンに向かい作業したり、篠崎図書館の広報誌『ぶらっつ☆篠崎』で紹介する本を読んだり、自宅での作業も悪くないと思っていました。しかし、やはり図書館で働く身としては、たくさんの本に触れていたいという気持ちももちろんあります。

そのような生活が長く続き、身体を動かすことが割りと好きな私は外で何かをしたくてウズウズしていました。筋トレなどをして気を晴らしていますが、本当にしたいたのは自分の限界に挑戦することです。これまで、徒歩で80キロを歩いたり、ママチャリで往復240キロを走ったりと色々挑戦してきました。最近では登山で自分の限界に挑戦しています。登るのは、日本アルプスなどの本気の山でなく、スニーカーで登れるような山です。それでも単独の山では物足りないもので、いくつかの山を続けて登る縦走をしています。これまでに、陣馬・高尾山縦走、筑波山縦走、外秩父七峰縦走などをしてきました。

このコロナ禍で、登山も自粛しているので、今は自宅で縦走の本を読んで、計画を立てたり、登山してい

るイメージをしたりして楽しんでいきます。私が今、読んでいるのは『週末縦走詳細ルートガイド』です。本書は初級者から中級者向けです。日帰りまたは一泊で歩ける首都圏の26のコースが丹沢・箱根・房総と奥多摩・奥武蔵・尾瀬の2つのエリアに分けて紹介されています。コースごとに標高・歩行時間・距離などのデータ、アクセス方法、詳細地図などが書かれています。この本の良いところは、登山口から下山口までのコース解説文がしつかりしているところです。道のアップダウンや分岐はもちろん、その場所の様子など事細かに書かれており、読むだけでその景色を思い浮かべることができます。また、一緒に掲載されている写真が素晴らしい。登山口の行き方や迷いやすい分岐点の写真には破線で進むべき道が示されているので、方向音痴の私には大助かりなのです。

次に挑戦してみたいのは丹沢にある塔ノ岳と鍋割山を縦走するコースです。このコースを選んだ理由は歩行時間や尾根歩きの長さです。体力の限界に挑戦でき、景色も楽しめそうなところ。一番の魅力は鍋割山にある鍋割山荘名物の鍋焼きうどんです。各種メディアに取り上げられるほど有名なので、私もぜひ一度食べたいです。長い時間山を登って食べる鍋焼きうどんは、さぞおいしいことでしょう。縦走の魅力は、あたり前ですが、長い間山にいられることです。山の中にいるとほとんど誰とも会わないので、色々なことを考えることができます。普段、あまりものを考えない私には最適です。また、自然をより感じることもできます。以前、本当に辛いときに風が背中を押してくれた気がして、風に「ありがとう」と大きな声で言ったことがあります。そして、歴史好きの私にとっての楽しみは、武士や忍者の気分で山道を歩くことです。

密書を持った忍者が、敵方の武士や忍者の襲撃を警戒しながら裏街道を歩くというシチュエーションを楽しめます。手裏剣が飛んで来たら、この木で避けようとか考えると楽しくてしょうがありません。なかなかマニアックなシチュエーションですが、静かな山を歩いているとそのような気分にならせてくれるのです。

コロナウイルスが収束しないと、縦走はもちろん、不要不急な外出をすることもできません。これまでも人類はペスト、コレラ、スペイン風邪など様々な感染症と闘ってきました。コロナウイルスとの闘いはまだ始まったばかりですが、必ず根絶できると信じています。今は不要不急の外出を控えるなど一人一人の努力が必要です。私もコロナウイルスが収束して、登山が出来るようになった時に、山で苦戦しないように自宅で筋トレをして過ごそうと思います。忍者気分登山を駆けるその日まで。

えっ、そういわれても……

はい？ 緊急事態宣言のあいだ、何をしていたか？ ですか。

当然、家でじっとしていましたよ、1日の大半をテレビを見て過ごしていました。

えっ、どんなテレビを見ていたか？ ですか。

主に映画とアニメですね。最近、本や漫画が映像化されている物が多いので読んで追いつかない分を映像で取り込んでいます。その他もろもろ興味のある番組は片っ端から録画しているので日々消化することに追われています。

次の質問は？ 本は読まなかったのか？ ですか。

もちろん読みましたよ、ただ……寝る前に少しづつだったので1冊しか読めませんでしたね。

タイトルですか？

『元検事が明かす「口の割らせ方」』です。思ったことを人に伝えるのって難しいですよ、それと同じぐらい相手の本音を聞き出すのも難しい。ましてや何とか罪を逃れたいと思っている人たちからどうやって話を聞き出すのか、そのこつがあればぜひ知りたいと思って読んだのですが、想像していたような特別な魔法があるわけではなく、相手の立場になって考えるとか相手の話をよく聞くなどの基本的な事が中心で、当たり前前のことをきちんとする事の大切さを再確認しました。ただし、この本の中ではその相手が特殊な人たち

なのでたいへん興味深く、勉強になりました。ぜひみなさんにもお薦めしたいですね。

その他にやっていた事ですか？

そうですね、テレビの前から動かないと体がバキバキになるのでお散歩や縄跳び、柔軟体操などをやりました。近くにいくつかのお散歩コースがあるので1日1時間〜2時間ぶらぶらしました。今の季節はお花がいっぱい！ 特にはなみずきとつつじ、藤の花がきれいでしたね。家に帰るとちよつと一息、そこで甘味をひとつまみ、なんてやってみましたからお菓子の摂取量が増えましたね、たぶん目方も……。

まあ、概ねこんなところでしょいか。

散歩

自粛生活が続く中、気分転換に散歩でもしようと久しぶりに外に出ると、満開だった桜もちりはじめていた。こんなところに土筆などあるのだね、自生しているのかしら、などとつらつら考えながら歩いていると、川にたどり着いた。川風に汗もひいたころ、モーターボートが白い飛沫をあげながら折り返していった。

江戸時代、江戸市中の川は、隅田川以外に橋を架けることが許されていなかった。江戸川と中川にかこまれ、小松川境川・一之江境川・新川などに貫かれているこの地域にとって、人や物を対岸へと渡す船は、生活に欠くことのできない大切な交通の手段であった。現在も都内に唯一残っている渡しがある。松戸市下矢切と葛飾区柴又を往復する「矢切の渡し」である。今は当時の風情を感じられる観光名所にもなっている。渡し以外でも、川や水路を利用し、江戸市中へ物資などを運ぶ水運も盛んだった。川や水路を利用した生活も、時代とともに道路や鉄道が整備され、水運から陸運へと移行されていったのである。

都心を縦横に通っている川や水路は、交通渋滞や通勤の混雑をさけて目的地に着くことができるから、移動手段のひとつとしては有用ではないか。「とても良い考えだ」と川を眺めながら、独り呟いた。いつか船舶免許を取るのもいいかもしれない。モーターボートで疾走している自分を想像しながら、足取りも軽く家路へとついた。

人の心を癒すもの

篠崎図書館で応援している日本翻訳大賞の候補作ということで『きのこのなぐさめ』という本を手にした。この本は、国際結婚をしてノルウェーに住むマレーシア人の著者が、最愛の夫を亡くした後の喪失と悲しみをきのこと出合ったことで癒されていく過程が描かれている。何をしても夫のことを考えてしまうという状態であった著者は、きのこのコミュニティに属し、きのこを知り、採り、料理して食べることで、きのこに夢中になり、深い悲しみから癒されていくのである。

私も5年くらい前に体調を崩し、何をやっても回復しなかった時に、近所の公園を散歩することで救われた。鍛えようとか体を治そうとか考えずに、ただただ自然の中を歩くのが良いと言われ毎日続けていたら、薄紙を剥ぐように回復に向かったのである。散歩は脳の疲れに効くというのだが、ストレスで脳がつかれていたのかもしれない。ひたすら散歩をしていると日々いろいろな楽しみがある。ノルウェーのようなきのこ大国ではないが、秋にはきのこ採取が楽しみの一つであった。近所の公園にはグルメ垂涎のタマゴタケが生えている場所があるのである。きのこ愛好家はきのこが生えている場所は秘密にすると『きのこのなぐさめ』に書いてあった通り、ひっそりとこっそりと採取するのである。それでも誰かに採られてしまっていることもあり、肩を落として帰ったりした。タマゴタケは素人でも見分けやすいきのこののだが、非常に美味であり、ソテーにしても、パスタにしても、スープにしても美味しい。

きのこに夢中になり、自然の中を歩いてキノコを探し、きのこにどんどん嵌っていった著者が、きのこに癒され悲しみが薄れたというのは自分の経験からもわかるような気がする。自然には人間の心を癒す力がある。今、新型コロナウイルスの蔓延で Stay Home が強調されている。もちろん密になるような外出は控えるべきだが、庭やベランダで植物に触れたり、対策を講じたうえで近所の公園を散歩することは、心の健康を保つためには必要なことであると思う。

また、何かに夢中になることも、目の前のことに気持ちが集中しがちな時には有効な手段であると思う。料理であるとか読書であるとか身の回りのことに集中するのもよいのではないか。苦しみが除かれ癒しにつながる過程が描かれた『きのこのなぐさめ』は、この時期におすすめの本である。



タマゴタケのソテーのタルティーヌ



公園で見つけたタマゴタケ



タマゴタケとエリンギの Pasta とスープ



収穫したタマゴタケ

あとがきのかわりに

図書館で働くあいだ、おおくの図書館員とさまざまななしをしました。本のはなし、映画のはなし、音楽のはなし、家族のはなし、病のはなし、昨日みた夢のはなし……。

わたしたちは、とくべつとくべつなところのないありふれた生活者ですが、それでもみなそれぞれがすこしずつちがいで、そのはなしのひとつひとはどれもかけがえのないものです。かんたんにきえていくそういう時間が、ぼくたちの暮らしていくきもちをささえているのではないかと書いてしまつては、いけないでしょうか。

図書館で働くふつうのひとりひとりが、このころ、どのように思い、どのように（本と関係をし、また、関係をせず）暮らしたか。ひとりひとりによるやわらかな記録として、書きのこしておかないか？

何日もひとりきりで過ごす部屋のなか、あるいはやや熱っぽく思いつめ、ぼくはそんなことを考えました。きつと、だれかとはなしをしたかったのでしょうか。緊急事態宣言下の4月のことです。

このアイデアに目をとめ、ひろいあげてくださった波多野館長をはじめ、篠崎図書館、篠崎子ども図書館のみなさんに感謝します。また、当冊子を手にしたみなさまへも。

『図書館員が屋根のしたで読んだ本のはなし』ふと思いついたつもりでいたこの題は、あとになって、篠崎子ども図書館の広報誌『なんじゃもんじゃ』のあたらしい連載「木にのぼったら見えたもののはなし」にみちびかれ発想したものだったと気がつきました。あわせて、ご覧ください。

見知らぬ土地の話聞くのが病的に好きだった

双子とピンボールについて書かれた小説の書きだしを読むとき、そうだ、ぼくにもそういうころがたしかにあった、と思います。そのことは、ぼくをそっとはげましたあとで、すこしさびしいきもちにさせます。理由はうまくいえないけれど。

元篠崎子ども図書館チーフ（2020年3月まで、江戸川区立篠崎子ども図書館に勤務）

図書館員が屋根のしたで読んだ本の話

令和2年8月1日 初版発行

著者 篠崎図書館・篠崎子ども図書館スタッフ

発行 江戸川区立篠崎図書館

江戸川区立篠崎子ども図書館

江戸川区立篠崎図書館

江戸川区篠崎町7-20-19

しのぎ文化プラザ内

電話 03-3670-9102

江戸川区立篠崎子ども図書館

江戸川区篠崎町3-12-10

電話 03-5664-2011

<https://www.shinozaki-bunkaplaza.com/library/>

